研究機関名：下関市立市民病院

研究課題名：急性期心不全患者における集団心臓リハビリテーションの実施量と身体機能改善の関連

研究期間：2026 年 2 月 1 日～2026 年 6 月 7 日

対象材料：

□病理材料（対象臓器名：　　）

□生検材料（対象臓器名：　　）

□血液材料

□遊離細胞

■その他（診療録　）

上記材料の採取期間：2025 年 3 月～　2026 年 1 月

意義：急性心不全患者におけるリハビリテーションの目的は、早期離床により過度の安静がもたらす弊害（身体機能低下、認知機能低下、せん妄、褥瘡、肺塞栓など）を予防することと、早期かつ安全な退院と再入院予防を見据えたプランを立案し実現することとされている。入院に伴う日常生活活動（Activities of daily living：ADL）や身体機能の低下として定義される入院関連能力低下（Hospitalization-Associated Disability : HAD）は、心不全患者において 37.1%に生じるとされ、生命予後の独立したリスク因子であると報告されている。あわせて、身体機能指標の 1 つである Short Physical Performance Battery：SPPB）は生命予後の独立したリスク因子であると報告されている。HAD の予測・関連因子は様々報告されているが、入院中の身体活動量や理学療法の頻度・期間との関連が報告されている。また、1 日の心臓リハビリテーションの実施量が多いほど、HAD の主要評価項目である Barthel Index（BI）の改善度が高くなることが報告されている。したがって、入院中の心臓リハビリテーションの実施量は ADL の改善や HAD の予防のみでなく、生命予後にも影響し得る要因となると考えられる。我々は 2025 年 3 月より入院中の心不全患者を中心に、個別心臓リハビリテーションに加え、運動療法の頻度・量の増加による ADL や身体機能の改善を目的とした集団心臓リハビリテーションを開始した。しかし、前述した報告は ADL の指標である BI の改善度に着目した報告であり、身体機能指標の 1 つである SPPB の改善度に関する報告は限られている。

目的：急性心不全患者における集団心臓リハビリテーションの実施量と身体機能改善の関連を検討すること。

方法：当院の患者データベースおよび電子カルテより後方視的に通常診療の範囲内で得られる患者基本情報や医学的情報、治療経過、リハビリテーション経過、退院時の身体機能評価を診療録より収集する。

個人情報の取り扱い：患者様の個人情報は、個人を特定できる情報とは切り離した上で使用する。また、研究成果を理学療法関連学会で発表するが、患者様個人を特定できる個人情報は含まない。

問い合わせ・苦情等の窓口：

〒７５０－８５２０
山口県下関市向洋町一丁目１３番１号
下関市立市民病院　リハビリテーション部　月城　一志
TEL　０８３－２３１－４１１１　　FAX　０８３－２２４－３８３８